

Title	ワルラスとパレート
Sub Title	Walras and Pareto
Author	松浦, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.11 (1971. 11) ,p.1039(51)- 1061(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19711101-0051
Abstract	
Notes	限界革命百年記念特集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19711101-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

価格決定における需要の役割

以上すべての事例をつうじて、需要側の条件なしに価格比が決定されるのは、(イ)の場合のみであり、ほかの場合はずべて需要因子が価格決定に参加せざるをえないことに注目すべきである。冒頭に述べたような「限界革命」の意義の一半は、この種の事情のうちに見出されるべきものであろう。

(経済学部教授)

ワルラスとパレート*

松 浦 保

はじめに

ワルラスとパレートの出会い

パレートの転向

ワルラスとパレートの破綻

むすびに——パレート研究の現代的意義——

はじめに^(注1)

伝記を研究することが、経済学の研究にどれだけ役立つことになるのであろうか。これは少しでも経済学史に関心をもち、その研究を手がけた者ならば、かならず一度は心にいだく疑念であろう。そしてその問いがあまりにも素朴であり、しかもそれに答えることがあまりにも幼稚すぎると思っ
てか、多くの人びとは、あたりまえのものとして、たとえ心のなかに解決できない疑いをもちなが
らも、あえてとりあげないのが通常である。

さて、はたしてこの問いをなおざりにしてよいものであろうか。いま、一つの経済学史上の大き
な問題に直面したとき、われわれは、否応なしにこの問いに解答をあたえておかなければならぬ
ことに気づく。その問題とは、1870年代の初頭に、ジェヴォンズ、メンガー、そしてワルラスが「限

* この論文は『三田学会雑誌』の「限界革命特集号」のために執筆されたものである。慶應義塾大学の特別研究休暇期間
をこの論文執筆に利用できたことをまことに幸せと思っている。また研究費をいただいたイタリアの Consiglio Nazionale
delle Ricerche、昨年1年間御厄介になったローマ大学 Istituto di Statistica e Ricerche Sociale "C. Gini" をして今年
講義の機会をあたえていただいた ミラノ・ボッコーニ大学に対して心から感謝したい。また今夏コモ湖畔ベラジョでの
「限界革命」にかんするセミナーがいかにものりゆたかであったかを書いておかなければならないと同時に、個人的にセ
ミナーの機会をあたえてくれたフィレンツェ大学の友人バルッチ教授やパーミンガムを訪れたとき議論に応じてくれたハ
チソン教授におうところが大きいことも述べておきたい。とくに同じ研究に従事するタラッジョ教授との討論はこの論文
作成に直接の影響をあたえている。さらに、今年ヨーロッパにおける「限界革命」にかんする二つの国際会議、すなわち
ウィーンのメンガー記念およびマンチェスターのジェヴォンズ記念のそれぞれに出席できた喜びを最後に記しておく。

注(1) ここで展開されている経済学史研究方法は、1971年ベラジョでおこなわれた『限界革命』にかんするセミナーの成果
である。かならずしも同じであるとはいえないが、この方法の基礎はクーン [17] の影響をうけているといつてよいであ
らう。

界革命」の口火をきった主要な動機がなにであるかという問題である。そこには、いくつかの説明を見いださう。また3人の主導者たちについて、それぞれ異なった要因が働いているのも事実であろう。そのなかで、よくいわれているのは、イギリス古典学派経済学の生成・発展期には、その資本主義経済がまだ十分な生産力をもたず、経済問題がもっぱら生産面にむけられていたのに対して、「限界革命」期においては、すでに生産力の十分な発達をみており、その関心が需要面にうつり、消費者主権の確立という現象を通じて、限界効用理論の歴史的前提がうみだされたという説明である。

しかし、3人の限界効用理論の主唱者たちの伝記を調べてみると、はたしてこのような説明が正しいものであるかどうかという疑問をもたざるをえなくなる。そして、このような説明が、どうもマルクスの概念にもとづく上部構造が下部構造によって規定されるという経済一元的な決定論のありきたりな公式によっているのではないかと思えてならない。

たとえば、その良い例として、^(注2) ジェヴォンズをとりあげてみよう。ブラックによれば、ジェヴォンズが限界効用理論をうみだしたのは、オーストラリア滞在中に、その豊かな資源をイギリスの乏しい資源に比較することができたからであり、この体験を通じて、限界効用理論にとって必要な稀少性概念を明確に意識し、稀少資源の配分の理論として、限界効用理論を創唱したのであるという。

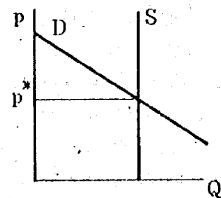
もし、ジェヴォンズの限界効用理論確立にかんするブラック説が妥当であるとすれば、あきらかに先ほど述べた通説は疑わしいものとなる。というのは、通説においては、需要に対する生産の豊饒性を前提にして、この理論の発生要因を説明し、ブラック説は、その稀少性に原因をもとめているからである。

理論史的視点から考察すれば、限界効用理論がもつ理論体系自身において、必要条件として前提されなければならないのは、まさに稀少性概念であり、^(注3) この概念の認識こそ、限界効用理論の発生にとって決定要因であるといわなければならない。これに対して、消費者主権の確立という事実は、この理論の成立にとっての歴史的背景にはなりえても、理論発生に決定的役割をはたしえないことは、その確立がこの理論の論理構造にとって必要な条件でないという点から判断することができる。したがって、このような通説によって、限界効用理論の発生を説明することは、批判されるべきであるという立場が、このような推論から当然生じてくる。

たしかに、いま述べたような理論史的視点を極端におしすすめていくと、スティグラーの分析に

注(2) ブラック [8] を参照。

(3) 限界効用理論の基本的性格が非弾力的な供給曲線にもとめられることは周知の事実であり、これは稀少性を意味している。この図をみれば、稀少性こそ限界効用理論の基本的な条件であることがすぐわかるであろう。



みられるような経済学の発展を論理の展開におしこめてしまう立場に行きついてしまうであろう。^(注4) つまり先ほどの通説によって説明されたような、理論とは無関係な歴史的な要因は、決定要因として不要のもの、もしくは不確かなものとして捨象されてしまい、経済学史として窮極にのこるものは、その論理的な骨組みの変化だけとなり、経済学史研究の目的は、このような論理上の変化さえ追求すればよいという立場になってしまう。

しかし、このような立場は、経済学史研究者の批判をあびないわけにはいかない、というのは、このような分析視点からみるならば、経済学史研究の存在理由は失われ、当然の帰結として、現代において最高水準にある理論を研究さえしていれば十分であるという主張がでてくる。しかも、さらに重要なことは、経済学史研究において、もっとも重要であると思われる理論の変革要因を、われわれはこのような視点から把握できない。すなわち、論理の斉合性を追求して、理論の論理構造が完全化していく連続的な過程のみが追求されることになり、限界革命においても、またケインズ革命においても、その変革の意義が見失われてしまうおそれが出てくる。

このように考えてくると、ここでわれわれが経済学史研究における新しい研究方法をみいだされなければならないことに気づくのである。その研究方法とは、単に歴史的諸要因のなかから問題となっている理論を発生せしめた要因を抽出し、その発生現象を理解できる説明をあたえるという作業でもなく、また単に論理的展開として経済学史をとりあつかう手法でもない、なにものかであるはずである。

このような新しい研究方法をみいだすために、ここで考えておかなければならない重要な問題がある。それは、これまでの研究方法をこのように対立する二つの視点に分裂させてしまった要因についての検討であるといつてよい。

シュンペーターは、その大著『経済分析の歴史』において、^(注5) 経済学の最近100年間のいちじるしい進歩を、1848年のJ・S・ミルの『経済学原理』と1948年のサミュエルソンの『経済分析の基礎』との比較によって、容易に知ることができると述べているが、このことは、もう一つの重要なこと、つまり現代の、少なくとも限界革命以降の経済学の特性を意味していることに気づく人は決して少なくないであろう。現代の経済学は専門的な職業者集団——大学および研究機関の研究者といたる人びとの集団——の手にゆだねられ、その集団以外の人びとには関知できない水準にまで専門化されてしまったのに対して、^(注6) アダム・スミス前後の、経済学がちょうど体系化されつつあった時期においては、^(注7) 専門家によって経済学はまだ占有されておらず、一般の、もしくは非専門的な観

注(4) スティグラー [40]、[41] はこの視点にたつてとりあつかわれた代表的な経済学史といえよう。また必ずしも全面としてこの立場とはいえないが、その例としてブローグ [9] をあげてもよいであろう。

(5) シュンペーター [38] 39頁。

(6) J・S・ミル [19]。

(7) サミュエルソン [34]。

察者による考察を通じて、経済学は十分進歩する余地をのこしていたのであった。

これまで経済学史研究者の多くは、まだ専門的な職業者集団の手にゆだねられていない時代の経済学発展をとりあつかってきたために、歴史的要因と経済学発展を単線的にむすびつける経済学史の研究方法を十分可能としてとりつづけてきたし、現在なおとりつづけているのである。しかし、このような立場に対して、現代の経済学における特性を重ずる立場の人びとは決して満足しなかったことはいままでもない。かれらは、むしろ専門的な職業者集団の手による経済学の進歩が、その分析技術上の進歩であることに眼をつけ、経済学の論理構造の変化をもって経済学史研究の主要課題とみなしたのである。ここにこれまでの研究方法の分裂要因を容易にみいだすことができる。

この「職業者集団」^(注8)の概念を十分に検討することが、今後われわれが経済学史を研究する場合の重要な手がかりになるのではないであろうか。というのは、現代の経済学の進歩がこのような職業者集団のなかでおこなわれ、この出現が経済学史研究方法に大きな衝撃をあたえているからである。

このような職業者集団内では、特定の専門的訓練を受けた人びとが、特定の手法で経済学を研究し、かつ改良しようと試みていることがみとめられるであろう。その訓練および手法のもとで、もっとも完全な体系が仕上げられ、これがその集団の模範的理論的体系としてみとめられる傾向をもつであろう。まだ十分に経済学が専門化されなかった時代であるにせよ、J・S・ミルの『経済学原理』をそのような集団の模範的体系としてみなしてよいであろうし、また真の意味での、このような模範的体系としてマーシャルの『経済学原理』を考えるとよいであろう。

J・S・ミルやマーシャルの例からもわかるように、このような集団のなかである理論体系が、模範的なものとして、^(注10)支配的地位を確立する事実^(注9)はこれまでの経済学史においてしばしばみられた。ところが、このような支配的地位はかならずしも永続的なものでないことも学史上の事実としてみとめられうる。そこには、新しい模範的体系の交替、そしてその確立がみられるのである。われわれは一般にその変革に「革命」という名称をあたえてきた。J・S・ミルに対してジェヴォンズ、そしてマーシャルに対してケインズの批判がこの変革をうみだし、前者が「限界革命」の、そして後者が「ケインズ革命」の始発点となったのである。

それでは、どのような過程をたどって、模範的体系が批判され、その地位を譲らざるをえなくなるのであろうか。もちろん、複雑な要因にもとづき、きわめて錯綜した過程をたどることが現実の実態であろうが、ここで重要な論点としてとりあげなければならず、また容易に推論できることは、この職業者集団のなかで既存の模範的体系に、なんらかの理由で危機が生じたとき、その体系にはふくまれていなかった分析手段をもったアウト・サイダーが、その分析手段を使用して構築した理

注(8) この概念はクーンのいう scientific community 「科学者集団」にあてはまるかもしれない。

(9) この概念はクーンのいう paradigm 「パラダイム」に相当するものである。

(10) このことはクーンによれば normal science 「通常科学」になることを意味するであろう。

論体系をもって既存の模範的体系を批判し、かつそれに挑戦するという事実である。ここでいうアウト・サイダーは、既存の集団に所属している場合もあるし、いない場合もあり、むしろその重要な意味はすくなくともある種の異なった専門的な訓練、もっと広くいって、科学的訓練を受けた人びとをさすのであると考えてもさしつかえないであろう。

多様な要因をもつ歴史的条件のなかで、ある理論の発生について不確かな推理をかさね、実証に十分耐えることのできない説明をつくりだすよりも、むしろ「専門的な職業者集団」という概念をふまえて、そのなかで既存の模範的理論体系に対して、批判をあたえるアウト・サイダーがどのように異なった専門的な訓練を受け、また科学観などを身につけたか検討することがより実証的な経済学史研究と考えられるのではなからうか。ここに経済学史における伝記研究の重要性をみいだすことができるのであり、このような研究こそ、理論の発展を論理の展開のなかにのみ閉じこめることなく、理論の変革の意味を十分探りうる研究となりうるのである。

しかし、このような意味で、伝記研究が経済学史において重要であることが認識できたにせよ、ここでわれわれがわきまえておかなければならない必要な問題がある。それは、経済学史研究という視点からどのように伝記をとりあつかわなければならないかということであり、別な言葉でいえば、この視点から伝記をとりあつかう、なんらかの基準をもうけておかなければならないということである。そこで、いまその基準をつぎの2点に集約しておこう。

- 1) 既存の、およびアウト・サイダーの理論がもつ基本的性格に関連する伝記的事実。

ジェヴォンズの例でいうならば、オーストラリアの体験にもとづいて、稀少性にもとづく限界効用概念の認識。

- 2) 専門的訓練もしくは科学的訓練の種類と程度、そしてそれを通じて獲得された科学観に関連する伝記的事実。

ジェヴォンズの例でいうならば、限界効用理論の厳密な定式化のために、どの程度の数学的訓練をうけていたか。

もちろん、このほかにも基準があるであろうし、それを排除するつもりはないが、一応このような基準をもうけておこう。

さて、これまで述べてきたことは、「ワルラスとパレート」という、これから論じようと思うテーマに接近する視点についての明確化であった。それでは、このような視点から、この論題について、なにをあきらかにしようとしているのかを、ここで述べておいて、本題にはいることにしよう。

一般に、ワルラスとパレートの関係は、前者が創唱した一般経済均衡理論を後者が解説を加え、普及せしめたものとして、とりあつかわれている。たしかに、その一面をみとめるにせよ、この2人の関係をこれだけにかぎってみてよいであろうか。

最近、ジャッフェの克明なワルラス書簡集^(注11)が出版され、さらにパンタレオーニ宛パレート書簡集^(注12)も出版され、またセンチニ宛パレート書簡集^(注13)を参照する機会にめぐまれることによって、ワルラスとパレートの関係を新しい視角からみなおすことが必要になってきた。

つまりワルラスの経済均衡概念を克服して、パレートが社会的均衡概念にもとづく社会科学体系をうちたてようと努力していた事実が、むしろこの2人の関係における重要な側面としてうきぼりにされてきたということである。それは、ワルラス理論の彫琢者としてのパレートではなく、むしろこの理論への批判者として、もしくはアウト・サイダーとしてのパレートである。

経済学が試練にあい、今後の発展方向をみさだめるのに苦しんでいる、クーン流にえばその危機にあると思われる現在、かつて経済均衡概念にもとづく純粋理論の限界を認識し、社会均衡概念にもとづく体系にうつっていったパレートを、現代の経済学がすすむべき一つの方向を1900年代の初頭にすでに先どりしていたものとして、またその方向を示唆していたものとして、もう一度みなおしてみる必要があるのではなからうか。そのために、ワルラスとパレートの関係を、経済学史における伝記的研究の視点から、もう一度とりあげて、そこに新しい光をなげあたえてみたいと思う。

ワルラスとパレートの出会い

ワルラスとパレートの最初の出会いは、パンタレオーニの仲介による。パレートの経済学研究にとって、パンタレオーニの存在は貴重なものであった。かれに純粋経済学研究への関心をもたせたのも、かれに一般均衡理論がその真髄であることをさとらせたのも、そしてのちに、かれをローザンヌ大学のワルラスの後継者としたのも、パンタレオーニの助力によるものであった。^(注14)

パンタレオーニとパレートの交友は、1890年10月1日付パンタレオーニ宛の書簡によって^(注15)はじまった。パレートはすでに42歳で、このときまでに、ワルラスの『経済学要論』パンタレオーニの『純粋経済学原理』にすでになじんでおり、相当程度の経済学の研究をおこなっており、パンタレオーニは33歳でパリ大学で経済学を教えていた。

この当時、パレートは人生の大きな転換の局面をむかえていたといつてよいであろう。一つには、母の死のあと、1889年12月に、最後は不幸な結果におわったアレクサンドラ・バクーニン嬢との結婚生活^(注16)に入ったことであり、もう一つの出来事は、およそ20年間にわたった実業家の生活に終

注(11) ジャッフェ [16]。

(12) パレート [30]。パレート宛の書簡はそのほとんどが四散してしまっていることをここで注記しておく。

(13) センシーニ [39]。

(14) 松浦 [21] を参照。

(15) パレート [30] Vol. I, lettera 1. これは、1890年『ジオルナーレ・デリ・エコノミステイ』誌に掲載されたパンタレオーニの「イタリアにおける私有資産の推計的総額」がパレートの研究に役立ったということを報告したものである。

止符をうちたいと願いはじめていたことであつた。そのころ、かれは Ferriere Italiane という鉄工会社の総支配人の地位にあつたのである。しかし、かれは、もはやそのような職業にはなんの未練もなく、興味をもちはじめた経済学、社会学および歴史の研究にすべての余暇をさいて、まさに不眠の努力をつづけており、もはや貴重な時間を一刻でも世俗的な活動についやすことは耐えられない気持になっていた。そしてかれは学問研究に専念できる職業につくことを強く願いはじめていた。

しかし、かれがイタリアにおいて教職につくことは絶望的であつた、というのは、かれは、妥協なしの自由主義者として、これまで保護主義的なイタリア政府を富者のためにする盗賊行為をおこなうものとしてのしりつづけてきたことによって、政府から要注意人物とみなされていたからである。^(注17) 1892年11月4日付のワルラス宛書簡で、パレートはつぎのように書いている。すなわち

「わたくしがスイスカイギリスの小さな町において純粋経済学に専念しようと思いついてから、すでに長い年月がたちました。もしローザンヌに任命されるというならば、とにかく早晚実現されなければならない、この計画の実行に、なにも気をまわして思いわずらうこともなくなるでしょう」

かれは、スイスとイギリスでは、イタリアとちがって、市民の自由が確保されており、自由に研究ができる環境があると信じていたのであつた。

しかし、実は、パレートがワルラスにこのような手紙を書きおくる背後には、知っておかなければならない興味深い事実がひめられていたのである。それは、パンタレオーニ宛とワルラス宛のパレート書簡を注意深くみれば気づくことであるが、パンタレオーニとパレートの間に、パレートがワルラスの講座を譲りうけることをめぐって、ある策略がねられていたのである。それは1891年の夏のことであつた。

それはさておいて、ここでワルラスの一般均衡理論に対するイタリアの経済学者たちの反応を知っておく必要があるであろう。^(注20) それは、パンタレオーニをのぞいては、きわめて奇妙な受けとり方をしていたのである。ジャッフェによるワルラス書簡集を検討すると、このことにかんして、面白い事実をみつけだすことができる。すなわち1874年3月12日に、^(注21)ワルラスは、当時ジュネーヴのアカデミーの比較文学の教授をしていた詩人マルク・モニエに手紙を送り、^(注22)イタリアで経済学の講座をもつ教授と有力な雑誌の編集者の名前を、かれの交換理論にかんする論文のコピーを送りたい

注(16) この離婚におわつたパレートの結婚生活については、ジャッフェ [12] を参照。

(17) パレート [29] (18)。この書簡集はジャッフェ編ワルラス書簡集 [16] に再録されている。ここでは、この2つの書簡集の照合はしなかった。

(18) パレート [30] Vol. I, 16.

(19) パレート [29] (10)。

(20) これについての知識はバルッチ [6] におつている。

(21) ジャッフェ [16]。

(22) Marc Monnier. このアカデミーはのちにジュネーヴ大学になる。

から、教えてくれるように書いていた。モニエは、この手紙に対して、A・ジャローヤとA・エツレラ^(注24)の名前をあげ、ワルラスはこれら2人を通じてイタリアの経済学界と接触しはじめたのである。とくにエツレラとの関係は深かった。しかし、かれは理論経済学者ではなく、そのためワルラスの一般均衡理論を十分に紹介するだけの資格をそなえていなかった。その良い例としては、ワルラスの唯一のイタリア語の論文で、1876年4月に『ジォルナーレ・デリ・エコノミステイ』誌上に最初^(注25)に採用された論文は、その表題が『数学の新分野——経済学への数学応用にかんして——』となっていることをあげればよいであろう。この結果、イタリアでは数学者仲間でワルラス理論が議論され、G・A・ザノンやA・ザンベリ^(注26)などが、これにかんして論文を書き、やがて最初にマトリックス^(注27)を使用し、効用理論における積分可能性問題^(注28)について論文を書いたB・アントネリ^(注28)をうみだして行くのである。

ワルラスは、自分の新しい理論に興味をもつ人びと、そして新しい国をみつけて、きわめて満足していたことも事実である。しかしワルラス理論の皮相な理解者たちの存在は、イタリアにおいて危険な状態をかもしだしていた。つまり数理経済学の価値を評価するよりも、イタリア政府にとっては、それを唱導する人びとの反政府的な言動を警戒し、数理経済学自体をも危険な理論として排斥しようとしていたのである。『ジォルナーレ・デリ・エコノミステイ』誌が当時出版しつづけられたことさえ、この時代の雰囲気からみて不思議なくらいであった。

パンタレオーニの厚い友情にささえられて、パレートは、この雑誌の主要な執筆者となるが、このことは、数理経済学者に対するこのようなきびしい状況のもとにおいては、ワルラスの同志的な意識をかきたてるに十分であった。いや、むしろパンタレオーニはワルラスの、このような感情をさらにあおったようである。

さて、どのようにして、パレートはワルラスに会うことができたのであろうか。1891年7月以来、^(注29)あらかじめパンタレオーニとうちあわせて、パレートはスイスのスプルーガの別荘に泊っていた。そしてワルラスに会える機会をねらっていたのであった。9月17日に、当時健康にめぐまれていなかったワルラスに、やっとパレートは、パンタレオーニの紹介状をたずさえて、会うことができた

注(23) A. Scialoja.

(24) A. Errera. かれはワルラスの経済理論の要約を1874年7月と1875年に紹介し、またジェボソンの『経済学の理論』を伊訳(1875年)したりし、限界効用理論のイタリア導入に大きく貢献した。

(25) "Giornale degli Economisti", Anna II, Vol. III, N. 1, Aprile 1876, p. 1-40.

(26) G.A. Zanone. それは1874年7月に *Rassegna di Agricoltura, Industrial commercio* という雑誌にワルラスの交換理論の紹介をおこなっている。〈Sulla teoria matematica dello scambio del prof. L. Walras〉

(27) A. Zambelli. かれは1876年に *La teoria matematica dello scambio del Signor Leon Walras* を出版している。

(28) G.B. Antonelli. かれはピザ大学で数学を学んだ建築家である。この論文のほかにはなにも経済学論文はない。アントネリ [2] この論文は1952年にデマリアの紹介とG・リッチのコメントをつけて、『ジォルナーレ・デリ・エコノミステイ』誌に収録されている。

(29) パレート [30] Vol. I, 16.

のであった。この年の9月21日付書簡^(注30)でワルラス夫妻にパレートは謝辞を送っている。すなわち

「貴方の心からのおもてなしへの感謝を、ワルラス夫人への感謝をもふくめて、すぐに述べて戴きます。妻とわたくしはとても感激しております。」

ワルラスはこの会見にきわめて満足していた。パレートの際限ない質問に心よく答えてくれた。そしてこのような友好関係は、パレートがフィエゾレ^(注31)の自宅に帰ったあとも、書簡を通じてつづいていった。

1892年11月、パレートは、ワルラスに対して、パンタレオーニが知らせてくれたと書きながら、ローザンヌで数理経済学の教鞭をとることについての可能性を問い、もしできるならば、そのようにしてほしいと助力をもとめた。^(注32)

この問いに対して、ワルラスはパレートに思いやりのある返事をあたえた。それも、単にローザンヌで教えるばかりでなく、ワルラスの後継者としての地位をパレートにあたえるという約束であった。おそらくワルラスは自分が背負ってきた苦難の月日を思いうかべ、パレートに同情したのである。^(注33)パレートは有頂天になって喜んだ。

このあと、パレートが執拗に催促するので、ワルラスはどのような理由でそれほどローザンヌにきたいのかと尋ねる。パレートの答えは、『ジォルナーレ・デリ・エコノミステイ』誌でのパレートの読者はまだ数人しかおらず、ローザンヌで教鞭をとることで、新しい考えをひろめたいのであり、豊かな財産をもっていれば、バリで仕事をしたいのだが、財力がとぼしいので、それは不可能^(注34)と持っているということであった。^(注35)

ともかく、多少の障害があったにせよ、そのほとんどが、ワルラスの好意によって解決され、^(注36)1893年4月19日に、パレートはローザンヌの2人の代表者エウジェニオ・リュッフィとルイジ・グルニエから当時まだアカデミー^(注37)とっていたローザンヌ大学経済学教授の任命書をうけとる。パレートにとって、ローザンヌにおけるワルラスの後継者としての地位を獲得するための戦いは、約1年間つづいたが勝利におわったのであった。^(注38)

その当時、ワルラス宛書簡^(注39)で、パレートはつぎのようにいっている。すなわち

「貴方は純粋経済学にたずさわっているわれわれすべてにとって師であります。貴方はこの学

注(30) パレート [30] Vol. I, 24.

(31) パレート [29] (7).

(32) フィレンツェ近郊の町、当時パレートはここに住んでいた。

(33) パレート [29] (16).

(34) ジャカローネ・モナコ [13] 153-154頁、パレート [29] (18).

(35) パレート [29] (26).

(36) ローザンヌ大学教授に就任するとイタリア国籍をはなれなければならないかもしれないといったようなこと。

(37) Eugenio Ruffi.

(38) Luigi Grenier.

(39) パレート [29] (15).

問に新しい道をひらいたのです。おそらく貴方の名前は、来るべき世紀において、決して忘却されえないものとなり、人びとが、この新しい学問を創設した者の名前として、常にそれを引用することとなるのは確実でしょう」

パレートの転向

「もしパレートがいなかったならば、一般均衡理論のまず第一の、そして真実の創唱者がワルラスであることは間違いないが、この理論が、のちにうけとったほどの名声は確保できなかったであろうし、ローザンヌ学派について決して語られることもなかったであろう」とウンベルト・リッチは述べている。たしかに、純粋経済学分野における独創的な、そして巧妙なかたちでなしたげられた真の前進は、一般的相互依存関係の構造を展開することに、その力強い精神をかたむけたワルラスの不朽の功績であって、それは決してパレートも分け前をあずかることのできないものと評価すべきであるにせよ、もしパレートがいなかったならば、これほどまでに、現代の経済学に一般均衡理論が滲透したかどうかは、はなはだ疑問である。

さらにパローネによるパレートに対する評価をみてみよう。経済分析の発展において、パレートが貢献したのは、まず第一にワルラスが固定的に考えてきた生産係数の技術的・経済的可変性についてのきわめてゆたかで独創的な研究であり、そのほかワルラスにおいては、まったくその兆候さえみなかった国際貿易および外国為替相場の理論であるとしている。しかし、パレートを高く評価する研究者は、これだけでは不満であり、『経済学提要』フランス語版にあらわれたパレート・オブティマム概念を見おとしはならないことを主張するであろう。またある者は嗜好と障害の概念を基礎とする経済力学理論をあげるであろう。パローネは、これらについては、すべてその核心的部分がワルラスの一般均衡理論体系のなかにふくまれており、とりたててパレートの貢献とすべきではないという評価をあたえている。要するに、パローネの言葉をかりるならば、純粋経済理論の分野において「パレートの労作について皮相な識者が信じているほど、かれの学問上の貢献について、素晴らしい偉大な貢献があったとはいえない」のである。リッチの意味においても、パローネの意味においても、パレートの地位はワルラスによつて創唱された一般均衡理論の普及者の地位である。

実は、パレートもこの事実を十分に自覚していた。そしてかれは、もしできるならば、どのよう

注(40) U・リッチ [33] 131頁。

(41) デマリア [11]。この論文は Spiegel, H. W. (ed.) *The Development of Economic thought* に再録されている。

(42) パローネ [5]。

(43) パレート [25]。

(44) L・アモロゾは、この点におけるパレートの功績を高く評価、自分自身でも「経済力学」という体系をつくりだそうとした。アモロゾ [1] XIX—XXIII頁。

(45) パローネ [5]。

にすれば、ワルラス理論を克服し、それを発展させることができるかを考え、つねにワルラスの普及者とどまらないように努力していたことを、われわれは十分みとめることができる。

まず、パレートが試みた努力は、ワルラス一般均衡理論体系の静学的な枠組みを、なんとかはずして、動的な社会変動現象を説明することにむけられた。

パレートは『経済学講義』^(注46)を執筆しているときは、このようなワルラス理論体系の単なる展開者である自分自身、その体系を超克しなければならないこと、そしてその体系の欠陥を自覚していた。実際に社会変動を説明する理論体系をふくめた書として、この『講義』^(注47)を出版することを企てたが、パンタレオーニの説得によって、この企てをあきらめたのであった。しかしもうすでにこのとき『社会学概論』^(注48)を執筆する基本的な構想がねりあがっていたのであり、事実、『経済学提要』^(注49)を書くとき、それと対になるべき『社会学提要』^(注49)を執筆する計画をパレートはあらかじめもっていたとみてよいであろう。

パレートは、のちにE・セッラ宛に書いた自伝的な書簡において、このことについて、つぎのように述べている。すなわち

「わたくしにとって幸せであったことは、わたくしが関係した『ジュールナーレ・デリ・エコノミステイ』誌がいろいろ異なった方針をまぜあわせていたことです。このとき以来、わたくしは、もしも経済現象が、研究もしくは分析の理由で、ほかの社会的現象から区別されることができたとしても、具体的な現象についての理論をうるために、後者を前者に再結合することがどうしても必要なであります。『講義』において、やっとなような方法をとることを開始したのでありますが、『提要』においては、その立場をさらに前進させ、そして、ついにそれが『社会学概論』^(注49)というかたちになったのであります。ともかく『単なる経済学では解決することのできない経済諸問題の矢面に、わたくしはさらされていたといつてよいでしょう。さらに、経済学を研究するに際して、わたくしが多くの社会学の原理を利用しているということにも気づいていました、…経済学を研究しているとき、わたくしは、しばしばその道の手前で閉ざされ、前進できないような地点にたたされたことがあります。わたくしはその道をきりひらかなければならなかったし、そのためにそのような〔社会学〕研究に従事しなければならなかったのであります」

ここに一つの大きな問題がある。それはワルラス理論体系の静学的性格を限界と認識して、その点を克服することによって、一歩前進した自己の体系をつくらうとしたパレートの意図はみとめるにせよ、どうして、今日、われわれが考えているような動学的経済理論へすすむことなく、社会学

注(46) パレート [24]。

(47) ボッピオ [10] 190頁、そのかわりに *Systemes socialistes*, 1902 が執筆されたという。

(48) パレート [26]。

(49) センシーニ [39] Appendice.

(50) 1913年6月11日付のE・セッラ (Emanuele Sella) 宛の自伝的書簡。

もしくは社会変動理論へとむかっていったのであろうかという疑問である。

その答えは、結論的にいってしまえば、きわめて簡単である。つまり当時の経済分析用具の貧困の結果として、当然の帰結であったにすぎない。

現代の経済理論の観点にたつとき、われわれはフリッシュによって明確に定義された動学概念のもとづいて、ケインズ以来の所得分析の手法にたすけられて、経済学の動学化がおこなわれうることを知っており、そこにヒックスやサミュエルソンの偉大な業績が光輝している事実をも知っているのであるが、パレートの時代は、もちろん所得分析手法はまだ開発されず、動学概念も模索の時代であったのである。フリッシュがこの概念を確立したのは、ようやく 1930 年代になってからのことであった。すなわち 1936 年『レビュー・オブ・エコノミックスタディ』誌上に発表した「均衡および不均衡の概念について」においてであった。

たとえば、シュンペーターの『経済発展の理論』^(注51)も、その動態現象の分析基礎は、現代的な意味での動学概念に立脚したものではなく、その結果として、かれは、静態理論と動態理論の二元論におちいり、ワルラス一般均衡理論体系にもとづく前者に、それとはまったく関係のない社会学的な概念である企業者の技術革新機能にもとづく後者を並列させて、議論を展開させるという手法をとっている。もちろん、のちにシュンペーターは、『経済分析の歴史』^(注52)において、このような手法の誤ちをみとめ、フリッシュによって定義された動学概念の正当性を肯定している。

それでは、パレートの動学概念はどのようなものであったろうか、かれは、均衡が攪乱されたとき、そこに新しく生ずる均衡の状態と、元の均衡の状態とを比較することを、動学分析と考えていたようであり、現代の用語法にしたがえば、比較静学の域をでるものではなかったといえよう。^(注53)

むしろ、ここで十分注目しておきたいことは、この点にかんするパンタレオーニの業績であり、われわれは現代的経済動学の一つの始発点を、その発生学的視点から、パンタレオーニにもとめることができるということである。^(注54)すなわち、この点については、パンタレオーニがパレートよりも一歩すすんでいたという事実をわれわれはみとめなければならないであろう。

さらに、ここで指摘しておかなければならない点は、ワルラスはもちろんのこと、パレートにおいても、資本のはたす動学的な役割についての認識、そして分析が不十分であったことであり、これにかんしては、1939年にヒックスが、『価値と資本』^(注55)において、基本的にはローザンヌ学派の一般均衡理論体系を基盤にしながら、オーストリア学派の資本理論を結合することによって、動学的

注(51) シュンペーター [36]。

(52) シュンペーター [38] 963頁。

(53) アモロソ [1] XXVI—XXXII 頁。ここでアモロソは、パレートが動学化に成功しなかったことを指摘している。

(54) シュンペーター [38] 857—858頁および松浦 [20]。

(55) ヒックス [15]。

な経済学体系へ前進できたことを思い出せば十分であろう。

端的にいえば、パレートはワルラスの理論体系を超克しようとしながら、その体系の自己完結的な枠組みのなかで苦闘しただけであり、それを内面的な論理の克服としてふみだすことができなかったのであり、それから抜けでるために、その体系とまったく別箇の社会学体系に依存せざるをえなかったのである。そしてそこには、当時の動学分析の未発達という現実がよこたわっていたのであった。換言すれば、経済理論が静学的なものとして自己完結的であり、それを動学化する分析用具がまだ見つけだされていない状況において、パレートがこのような理論を、変動する社会的現実を説明できるようにするという意味で、克服しようとするならば、どうしても経済理論の枠のそとに一つの理論体系を構築しなければならなかったのである。

さて、現代の動学理論の視点からみれば、たしかにパレートは経済理論を論理的な斉合性をたもちながら、しかも統合的に、動学化をはかることができなかったといえる。しかし、パレートがたどった道程は誤っていたとは、はたして評価することができるであろうか。むしろこのように経済学を、かれが構想した社会学体系の方向に発展させようとしたことは、現代の経済学がもつ問題をこの時代にすでに先どりし、今後のすすむべき方向を示唆し、一つの重要な意義をなげあてていると考えてもよいのではなからうか。いまここでこの点について考察をすすめてみよう。

パレートは変動する社会現象をワルラスによる一般均衡理論の枠組みのなかでは説明できないことから、たしかに社会学の研究へとすすんでいったのであるが、かれはそのような現象を説明する、当時存在した唯一の体系的な理論ともいえるマルクス理論には近づかなかったし、むしろこれを拒否したのであった。その理由は、第一にマルクス理論が雑多な社会変動要因を単純な物質的要因に帰してしまい、経済一元論的かつ決定論的展開をおこなっていることに賛成できなかったのであり、第二にパレートが社会科学を価値判断の極少化を通して科学的ならしめようとしたのに対して、マルクス理論においては公然とその理論の基底に価値判断をすえて、理論が構築されている点に不満をもったからであった。かれは、むしろ社会的均衡概念にもとづいて、このような社会変動の現象を説明する理論を体系化できると信じていた。

パレートの分析の基礎には、つねに均衡概念がよこたわっていたのは事実である。かれは、社会現象のなかに存在する、きわめて多くの要因がすべて相互依存の関係にあり、社会に生起する現象の一つ一つがそれらの要因の均衡として把握され、理解されうるものであると基本的に考えていた。しかしワルラスをのりこえて、パレートがこのような均衡概念を経済均衡概念から社会均衡概念^(注56)へと進化させようとい意図したのであったという理解を、パレートに対してもつならば、ただ単に経済学から社会学へという一つの社会科学の体系からもう一つの体系への推移としてパレートの転向を

注(56) パレートの社会均衡概念はきわめて難解であるが、要点を簡潔にまとめてあるはポッピオ [10] を参照。もしくは L. Amoroso <Vilfredo Pareto> in *Econometrica* 1938 がよい。

皮相に評価するのではなく、もっと別の意味の新しい評価をそこに見いだすことができるはずである。

このような視点にたつて、タラッシュ^(注57)は、近著『パレートの経済学への方法論的接近』において、パレートの社会学は経済社会学であり、しかも、その意味は、社会学において経済的要因を多く取りあつかっているという点によっているのではなくて、純粋経済理論から政策理論へ論理的に発展することによって、そのような性格をおびたものと理解すべきであると論じている。別な言葉でおきかえていうならば、パレートは経済均衡概念をいっそう一般化することを通じて社会均衡概念をめざし、これまで規範的であった政策理論を実証的な理論に転化させようとしたといえるのであり、かれをこのような観点に最初に経済学者の注意をむけた人として評価することができよう。この意味において、かれの研究は、政策の作成過程についての社会科学にもとづく実証的な理論を展開していると評価することができよう。

純粋経済理論の分野において、ワルラス理論の精緻化、そして普及化につくしたパレートの業績は、たしかに現在なお、多くの人びとによって評価され、その面における、かれによって前進せしめられた理論は、世界の第一級の経済学者にひきつがれて、さらに前進した有効な分析用具に、いまみがきあげられている。たとえばイギリスにヒックスやアレン、そしてアメリカにサミュエルソンをその例としてあげることができよう。しかし、かれ独自の立場として評価されるべき経済政策作成の社会的基盤への分析に注意をむけ、それを体系化したという功績については、いまどのような人びとが関心をもっているであろうか。パレートの社会学に関心をもっているパーソンズをその1人としてとりあげてもよいが、^(注58)かれはパレートの社会変動理論に比重をおきすぎており、しかも経済学がこれまで作りだしてきた有効な分析用具を無視している点で、ここでいう意味での真のパレートの理解者であるとは思えない。

むしろ、パレートがねらった社会均衡概念にもとづく理論を体系化する道は、バークソンの社会厚生関数の作成やアローの社会的意志決定過程^(注59)の分析^(注60)においてたどった方向を、さらにすすめていくことにあるのではないであろうか。事実、パレート自体、すでにこのような議論を、かれの『社会学』において試みているのである。このような分野におけるパレートのゆたかな構想にくわえて、現代の分析用具を使用し、かつそれを練磨することによって、貨幣・財政政策の基礎理論が、そして経済発展政策の基礎理論が今後かたちづくられていくのではなかろうか。

このような意味でパレートの社会学への転向を理解したとき、パレートに対して終生変わらぬ友情をあたえつづけてきたパンタレオーニの評価、すなわち「パレートの社会学の研究こそアルファ

注(57) タラッシュ [42] 14頁。

(58) パーソンズ [31]。

(59) バークソン [7] 310-334頁。

(60) アロー [3]。

を示すものであり、これに反してその純粋経済学の研究は、話をしめくり、一層高度な一般化を目指す、すすんだ研究の機会をもたないオメガの性質をもつものである^(注61)という言葉の深さを読みとることができる。

ワルラスとパレートの破綻

1894年7月20日以来、パレートはワルラス宛^(注62)の書簡において、「親愛なる先生」という呼びかけの言葉を使いはじめ、そしてかれの書簡が途絶する1901年6月23日^(注63)まで、その呼称をつづけている。この事実をみるかぎり、二人の関係はつねに親密であったし、最後までパレートがワルラスへの敬意を失わなかったようにみえる。しかしワルラス宛の書簡集を仔細に検討すると、そのような親密さがこの呼びかけを使い始めてすぐあとに、きわめて形式的なものになっていったことがわかる。はっきりと書簡集から読みとれるのは、1895年以降のことであり、パレートの手紙は1年に2回程度、しかも簡単な内容をしたためたものになっている。

この二人の冷却した関係を如実に証明してくれるのは、むしろパレートのパンタレオーニ宛の手紙であろう。この書簡をみるものはみな、パレートのワルラスに対する、敵意といってもよいくらいの烈しい憎しみの念を知ることができる。そのいくつかをここにとりあげてみよう。

まず1896年6月9日付^(注64)の書簡。「ワルラスは、多くの信ずべからざる事柄を印刷しています。貴兄はわたくしよりも若い。わたくしがそのようなものを書くようになったとき、どうかそのようなことはするなとわたくしに注意して下さい。」

つぎに1896年4月2日付^(注65)の書簡。「ワルラスは、いま形而上学によって霞のなかで生きています。そしてかれは井戸におちこんだ天文学者と同じ運命に出合っているのです。」

さらに1897年5月19日付^(注66)の書簡では「尊敬すべきワルラスはだんだん形而上学的になってきました。しかしかれはそれを悟っていません。いつか、かれはわたくしのところで、わたくしがかれと意見が一致しないのは、わたくしが先験的な推論をするからだといいました。わたくしはふきだしてしまいました。そしていまなおおかしくてたまりません」と。

そしてついに1909年6月10日にワルラスの75歳の誕生を記念して、ローザンヌでおこなわれた祝典には、パレートは、学部長に健康をそなっていること、そしてワルラスの偉業を自分が心

注(61) パンタレオーニ [23]。

(62) パレート [29] (43)。

(63) パレート [29] (61)。ただし1900年10月30日付書簡だけは“Cher M. Walras”になっている。

(64) パレート [30] Vol. I, 211。

(65) パレート [30] Vol. I, 197。

(66) パレート [30] Vol. II, 283。

から讚美していることをしたため、出席しなかった。それについて、1909年6月17日付のパンタレオーニ宛書簡でパレートはつぎのように書いている。すなわち

「ワルラスに対する式典は、ある意味ではお笑い草です。それは、数理経済学の創設者を記念しておこなわれるかわりに、世界平和を確保する方法を見いだすことで、その仕事に王冠をいただく社会哲学者——わたくしはこんなものは知らないのですが——記念するものとなったからです。」

同じ月の21日付書簡でパンタレオーニへ

「したがって、もしなんらかの雑誌がわたくしの手紙〔学部長宛〕とワルラスの演説を発表するならば、わたくしはつぎのような後記をわたくしの手紙につけくわえるでしょう。すなわちわたくしは、ワルラスの科学的社会主義のような数学的世界平和を噴飯ものと思っていることを注意せよと。」

さてこのようなワルラスとパレートとの対立はどのような理由で生じてきたのであろうか。この点についてはさまざまの見解がある。シュンペーターとパジョッティの見解をとりあげてみると、ワルラスとパレートの二人が純粋理論については同じ形式をもっていたが、その出生にかんする身分が異なっていたために、物の考え方、とくに社会観が異なっていた点をその対立の原因としてあげている。すなわちワルラスはダティ・ブルジョアの出身であったのに対して、パレートは貴族の出身であったのである。もちろん、この要因が二人の間に対立をひきおこしたにちがいない。しかしすでに自律性をもつ科学としての経済学をあつかう経済学者の対立を単なる身分の違いからくる社会観の相違に帰してしまうことは、きわめて皮相な見解といわなければならないであろう。むしろ、ここではわれわれは二人の学問上の対立——それは二人の科学観の相違や分析技術にかんする専門的訓練の相違によって生ずるものであるが——を問題にしなければならない。もしそのような対立が問題とされないならば、二人の人格的な対立が学問的な分裂を意味していたことを説明することはできなくなるであろう。ジャップフェの見解も、二人の社会観の相違にこの対立の原因をもとめるものである。すなわちワルラスが社会主義的思想をもっていたのに対して、パレートが過激な自由主義者であったと述べている。たしかに、ワルラスの75歳の誕生祝典のあとでパンタレオーニに宛てた先述の書簡をみると、ワルラスの社会主義的思想をパレートが冷笑していたことがわかる。しかしこの見解もシュンペーターの見解に対すると同じような批判があてはまるであろう。むしろ、

注(67) パレート [30] Vol. III, appendice 38.

(68) パレート [30] Vol. III, 596.

(69) パレート [30] Vol. III, 597.

(70) シュンペーター [37], 110—142頁.

(71) パジョッティ [4] 68頁.

(72) ベラジョでジャップフェに会ったときこの点にかんする、かれの見解をきくと、その社会観の相違にもとづくと強く主張した。

われわれにとって納得できるのは、ジャカローネ・モナコの指摘である。つまり二人の対立は科学観もしくは科学的方法論の相違、そして学問的訓練の相違に根ざしていたのであると。

このような見解を証拠だてるものとして、ここでパレートが晩年になって、忠実な弟子として最後までかれにつかえたセンチニに宛てた手紙を引用してみよう。すなわち

「わたくしは、パンタレオーニの『純粋経済学原理』を読むことによって、純粋経済学と数理経済学を研究する気になりました。まず最初にワルラスの著作を読みはじめたのですが、あまりにも形而上学的な部分が多いので、嫌気がさして、それを読みつづけることはとてもできませんでした。パンタレオーニの『純粋経済学原理』は、純粋経済学のなかに、形而上学以上のなにかがあることをわたくしに気づかせてくれました。もう一度ワルラスの著作を読むことにし、形而上学的な部分などは、あってもなきがごとくに、あっさり読みながして、そこにもっとも重要な理論、すなわち経済均衡理論があることを見いだしたわけです。」

また同じく、センチニに つぎのようにも書いている。すなわち

「わたくしが純粋経済学の適切な概念をもちえたのは、パンタレオーニのお蔭であり、経済均衡の明確な概念をもちえたのは、ワルラスのお蔭であります。のちに、わたくしはパンタレオーニとは親しくなりましたが、ワルラスとは仲たがいをしてしまいました。なぜならば、わたくしはかれの気狂いじみた形而上学にはついていけなかったからです。……ワルラスのわたくしに対するいじわるについて、貴兄はどのようなものであったかといえるでしょうか。かれはわたくしへの悪感情をヨーロッパ中にかきたてたのです。かれはポルトキヴィッチをしてわたくしの『講義』の中傷にみちた書評をかかすようにしました(わたくしはその証拠をもっています)。かれはポアンカレに手紙を書き、事実をまげて、ポアンカレが量にかんする概念化についてわたくしと見解が不一致であることを信じさせるような歪曲をもちいたのです。……」

パレートは、はっきりワルラスの形而上学的傾向を最初から嫌い、その後もその傾向についていけなかったことを告白しているのであるが、この形而上学的傾向こそ、科学観もしくは科学的方法論の相違、そして学問的訓練の相違から生じた二人の経済学のあり方を区別させるものであり、それと同時に人格的対立としてあらわれた二人の関係の破綻を理解する手がかりとなるものなのである。

ワルラスの経済学に対する態度は、理想的な完結した理論体系をつくりだし、そこにある種の優

注(73) センチニ [39] 61頁, 1911年8月8日付書簡.

(74) パンタレオーニ [22].

(75) ワルテス [45].

(76) センチニ [39] 61—62頁.

(77) ユナイダーは、このようなパレートの形而上学的傾向に対する拒否の態度が、無差別曲線の理論をうみだすにいたったのであると論証している。ユナイダー [35].

美さをもとめ、もしそれがえられたときは、それを誇る哲学者としての態度であったのに対して、パレートの態度は、理論とは現実を説明する用具であり、つねに現実をより良く説明できる理論によって、説明できない理論が克服されていくという実証的な考え方をもつ自然科学者の態度であったのである。

パレートにとっては、ワルラスとちがって、どのように論理的に完結な斉合性をもった理論も、現実を説明し、現実のテストに耐えるものでなければ無意味であり、それは克服さるべき運命にあると考えていたのであった。

1891年の秋、最初にパレートがワルラスに会ったとき、ワルラスはわが同志としてパレートを歓迎し、この出会いを心から喜んだのであるが、パレートは不満であった。10月28日付のパンタレオーニ宛の書簡で、^(注78)「ワルラスは、ちょうどその周囲に対して、なんらかの予言をおこなおうとする哲学の学派のボスのように排他的です。かれは数学以外にはなんの救いもないと考えています。……」と述べ、ワルラスの言動の底にひそむ学問に対する態度をすでにこのときにするどくかぎとっている。

そして、このようなワルラスの態度から、パレートをして、つぎのような批判をあたえさせるようにしてしまったのである。^(注79)すなわち「レオン・ワルラスはかれの理論を実際の問題に応用しようとした。そのような甘い性急さは容易に説明される。しかしまったく卒直にいう必要があるのであるが、その応用は未熟であった。というのは、理論の成果が実際の使用にうつされるようになるまでには、まだ時間、研究、作業が必要であるからである。さらに、人間社会にかんする、すべての現実問題は経済的なものだけで決して考えられえない問題である。それは大体いつも経済学と社会学とに属するものである。……かれ〔ワルラス〕は、経済学に対しておこなった仕事に類似したことを社会経済学に対してもおこなおうとしたのであるが、かれの努力には成功の冠がさずからなかったのである。」これが『ジョルナーレ・デリ・エコノミステイ』誌におけるパレートのワルラス追悼の言葉である。

ワルラスは、オーギュスト^(注80)という経済学者を父とし、その父の友人にはクールノーをもっていた。しかし、かれが若き日に夢をえがいていたのは文学者であった。またかれが十分な数学や物理学の専門的訓練をほとんどうけておらず、独学でそれを習得したのである。かれ自身も告白しているように、^(注81)数学はかれにとって苦手であつたらしい。さらに重要なことは、これらの自然科学の分野で

注(78) パレート [30] Vol. I, 28.

(79) パレート [27] 10頁。

(80) 父の影響は大きく、かれの形而上学的傾向もそれによる面が大きい。ルロワ [18] のなかの、とくに1863年7月15日付のレオン宛書簡参照。355頁。

(81) ポルトキヴィッチ (Bortkiewicz) 宛1888年5月19日付およびドカーニュ (D'Ocagne) 宛1891年5月10日付のワルラス書簡をみよ。

専門的訓練をうけることによって、その科学観を身につける機会を、かれはほとんどもたなかったのである。むしろワルラスは、欲望に対する苦悶から人類を救済する夢をいだけ、生来の理想主義者だったのであり、かれにとつて、数学はそのような美しい世界を画く唯一の武器であったのである。

他方、パレートは、トリノ工科大学を卒業し、当時としては自然科学者としての専門職業につきうる、十分な数学と物理学の素養をもち、その専門的訓練を通じて自然科学観を身につけていたのである。^(注82)数学者ジョバンニ・リッチが評しているように、^(注83)また効用理論における積分可能性問題^(注84)についてヴォルテッラから批判を受けたように、当時としてもそれほど数学に熟達していなかったにせよ、ワルラスに比較するならば、問題にならないほど高い水準にパレートの水準は達していたといえようし、もっと重要なことは、そのような自然科学的な専門的訓練が、科学的な直観の一時性をきびしく自覚した経験主義者^(注85)にかれをつくりあげていたのである。つまりかれは、実験を通じて現実のテストをおこない、創造しては破壊する作業をくりかえすことによるのみ、理論が前進することを知っていたのであった。

1901年6月23日の葉書でパレートのワルラスへの音信は途絶えた。これまで述べてきたような二人の間に対立をもたらしした諸要因を考えると、この二人の関係の破綻が、ジャカローネ・モナコ^(注86)がいうように、必然的なものであり、そして価値ある訣別であったように、われわれにも思える。「わたくしの科学観は、ワルラスのそれとはまったく異なったものなのです。もし望むならば、わたくしはワルラスの均衡理論と少しも共通しないようなかたちで、わたくしの均衡理論を示すことができるでしょう」とワルラスが死んだ翌年に、^(注87)センジーニに書きおくれたパレートにとっては、かれの理論体系はまったくワルラスとは別箇の、新しいものであったのである。

むすびに —パレート研究の現代的意義—

これまでおこなわれてきたパレートについての評価は、パレートがワルラスの創唱した一般均衡理論を中核とするローザンヌ学派経済学の良き普及者としての側面であった。ことに、わが国におけるパレート評価は、ヒックスやサミュエルソンを通じて、ワルラス理論の彫琢者としての地位が

注(82) かれの卒業論文は固体の均衡にかんする基本原理にかんするものであり、その表題は《Principi fondamentali della teoria dell' elasticità dei corpi solidi》。

(83) G・リッチ [32] 110—111頁。

(84) ヴォルテッラ [43] 436—458頁、とくに [44] 296—301頁。

(85) イタリア語の *esperienza* という語は、実験と経験の意味をともにもつ。したがって経験主義者の内容に実験主義者の意味をふくめて解さなければならないであろう。

(86) ジャカローネ・モナコ [14]。

(87) センジーニ [39] 61—62頁。

あたえられてきたにすぎない。

しかし、パレートを正当に理解しようとするものにとって、このような評価をゆるすことができるであろうか。というのは、たとえば、ヒックスやサミュエルソンがとりあげているパレートの純粋経済理論の部分は、そしてとくに無差別曲線やパレート・オブティマムの議論は、パレートの有機的に統一されている総合的な学問内容の極く一部にしかすぎないからである。『経済学講義』というパレートの経済学体系を比較のまとまったかたちで示す著作を例にとると、アングロ・サクソンの現代の経済学者たちがとりあつかっている純粋理論の部分は、1964年出版された版について全409頁中たかだか74頁にすぎないのであり、残りの部分はまったく無視されてしまっていることがわかる。しかもパレートの経済学にかんする著作の英訳さえ現在ない始末である。このような状況で、パレートの真の姿を理解することができるであろうか。パレートの思想内容の全体像をふまえながら、かれの純粋経済理論を位置づけることは、現在そこでは到底不可能のようである。

また、とくにアメリカにおいてであるが、パレート社会学が、かれの経済理論とは別箇にとりあげられ、研究されているが、この状況も、これまで述べてきた理由から、パレートを理解するためには、不十分であろう。

要するに、パレートは、アングロ・サクソンの社会科学の世界においては、ローザンヌ学派経済学の普及者としてしか、もしくは社会学者としてしかとりあげられてこなかったのである。

ついでに、パレートの母国であるイタリアにおけるパレート研究の状況を簡単に付記しておく、^(注88)パレート著作集、^(注89)パンタレオーニ宛書簡集、パレート研究雑誌『カイエ・ヴィルフレード・パレト』が、ここ10年あまりの間に、あいついで刊行されてきたにもかかわらず、それほど活発とは思えない。その理由のいくつかをあげれば、第一に世界的にみて、戦後経済学史研究の退潮がみられたこと、第二に、現在の経済学研究の動向が動学研究にむかっており、パレートが動学化に成功していなかったこと、第三にパレートの主要な理論部分は、これまでイタリアのテキストに吸収され、かつ大学の講義で教授されていることから、あらためてパレートを研究しようとする気運にめぐまれていないこと、そして最後にパレートが晩年の一時期にムッソリーニにかつがれて、ファシズム政権に関与したために、戦後の強い反ファシズム傾向のなかで、その研究はタブー視されてきたことなどをあげることができよう。

小論においては、ワルラスとの関連で、パレートの主張した社会科学体系の全体像を、経済学史の視点にたつて、とらえてみたのであるが、そこでわれわれが理解できたことは、まずこれまでパレートにあたえてきた評価を変えなければならないということである。というのは、ローザンヌ学派経済学の普及者としての地位は、かれの体系においてはより下位に属する経済均衡概念の習得過

注(88) Ouvres Complètes de Vilfredo Pareto, publiées sous la direction de G. Busino, Librairie Droz, Genève.

(89) Cahie Vilfredo Pareto. Revue européen d'histoire des sciences sociales, Librairie Droz, Genève.

程において派生したものであり、かれにとっては、ワルラスを通じてこの概念を学びえたという社会科学研究的入門的価値はあったにせよ、真の意図はそれをのりこえ、社会均衡概念にもとづく社会科学の理論体系を構築することにあったのである。しかもすこし言いすぎかもしれないが、もっと世俗的な観点からいうと、パレートの純粋理論の普及者としての位置は、かれがローザンヌ大学のワルラス後継者としての安定した研究者として地位をうるための、かりの姿であったともいえよう。

そもそも、ワルラスとはちがって、このように、経済均衡概念から社会均衡概念へと、パレートがすすんでいったことは、かれら二人の社会科学に対する研究態度の相違に帰することができる。ワルラスは理想主義であり、かれの現実をあたたくみる眼が社会哲学者のそれであったのに対して、パレートは経験主義であり、かれの現象を冷たく観察する眼は自然科学者のそれであったのである。かれらの専門的訓練がまったく異なっていたのであるから、これは当然のことであったろう。かれらは、パレートがワルラスの形而上学的性向を嫌うという表現にあらわされているように、最初からあいられないものを、おたがいにもっていたのである。そしてワルラスの純粋経済理論の限界の認識、その展開者としての挫折感——それらを通じて、パレートはワルラスをのりこえていかなければならず、かれがもつたものは、かれの科学観からみて十分納得のいく、社会均衡概念にもとづく社会科学理論の体系化であった。しかし、この結果は、必然的にかれら二人の仲を割き、人格的にも訣別せざるをえなかったのである。しかしこのような訣別もそこに新しい学問体系をうみだす努力として価値あるものであったのではなからうか。

このように、ワルラスに対するパレートの立場を理解してみると、あらためてパレートをローザンヌ学派経済学の普及者としてのみ評価することが片手落ちのように思わざるをえない。もちろん、ここでそのような評価を否定する意図はすこしもない。それは、パレート評価における重要な側面であり、かれの研究は、この分野においても、光り輝いていることは事実である。しかし、われわれはもう一つの評価を忘れてはならないと思う。それは、経済均衡概念をのりこえて、社会均衡概念にすすみ、それにもとづく社会科学理論体系をうちたてようとしたことである。

このパレートに対する理解は、現在、われわれがもう一度考えなおしてみなければならない重要な価値をもつものであることを、ここで指摘しておきたい。もうすこし、この意味を深く考えるならば、1900年代の初頭に、パレートは現代の経済学がすすむ一つの方向を先どりして、われわれに有効な示唆をあたえてくれていたと、ここでいいたいのである。

クーン流にいうならば、現在、経済学は科学としての危機にたっている。それは、これまで模範的な理論体系として考えてきた現代理論が現在の経済的な現実の解決に耐えられなくなっているという意味ばかりではなく、経済学の内部においても支配的な模範的体系とは根本的に異なった立場にたつ人びとの議論が批判者としてあらわれはしている。現代の経済学における模範的理論体系は、

ワルラスの一般均衡理論の枠組みに、オーストリア学派の資本理論、ケインズ学派の所得分析など現代の経済学の潮のなかでうみだされた諸成果を統合したものといえよう。いまこのような体系が危機にあるとすれば、われわれはワルラスをのりこえようとしたパレートをもう一度みなおさなければならぬといえよう。しかもワルラスの一般均衡理論体系を骨組みとする現代経済学の模範的体系は吸収されなかったパレートの仕事こそ、このような危機において、新しい模範的体系をつくりだすためのアウト・サイダーとしての役割をはたすのではないであろうか。

それは、パレートが体系化するために苦しんだ社会均衡概念にもとづく社会科学の理論体系であり、タラッシュのいう意味で理解するならば、純粋理論を論理的に発展させて、現実の経済・社会問題に対処する経済政策作成過程の分析、つまり実証的な政策理論をもふくめた社会科学の理論体系である。今後、われわれは、そのような意味での経済学へとすすんでいかなければならないのではないであろうか。

参 考 文 献

- [1] Amoroso, L.: «Pareto Matematico ed economista» in *Manuale di economia politica* di Pareto, Traduzione sulla seconda edizione francese, 1965.
- [2] Antonelli, G.B.: *Sulla teoria matematica dell'economia politica*, 1886.
- [3] Arrow, K.: *Social Choice and Individual Values*, 1951.
- [4] Bagioti, T.: «Presentazione alle lettere Pareto-Walras» in *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, 1958.
- [5] Barone, E.: «L'opera di Vilfredo Pareto e il progresso della scienza» in *Giornale degli Economisti e Annali di Statistica*, 1924.
- [6] Barucci, P.: *The Spread of Marginalism in Italy (1871-1890)*, the unpublished paper for Bellagio Conference, 1971.
- [7] Bergson, A.: «A Reformulation of Certain Aspects of Welfare Economics» in *Quarterly Journal of Economics*, 1938.
- [8] Black, C.: *W.S. Jevons and the Foundation of Modern Economics*, the unpublished paper for Bellagio Conference, 1971.
- [9] Blaug, M.: *Economic Thought in Retrospect*, 1962.
- [10] Bobbio, N.: «Introduction to Pareto's Sociology» in Banca Nazionale del Lavoro, Quarterly Review, 1964.
- [11] Demaria, G.: «Vilfredo Pareto» in *Revue d'economie politique*, 1949, English translation in H. W. Spiegel: *The Development of Economic Thought*, 1952.
- [12] Giacalone-Monaco, T.: «Pareto e la Bakounin» in *Giornale degli Economisti e Annali d'Economia*, 1959.
- [13] Giacalone-Monaco, T.: «I rapporti Pareto-Walras secondo un carteggio inedito (1891-1901)» in *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, 1959.
- [14] Giacalone-Monaco, T.: «L'inevitabile, dignitosa Rottura fra Pareto-Walras» in *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, 1959.
- [15] Hicks, J.: *Value and Capital*, 1939.
- [16] Jaffè, W.: *Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, 3 vols. 1965.

- [17] Kuhn, T.: *The Structure of Scientific Revolutions*, 1962.
- [18] Leroy, L.M.: *Auguste Walras, économiste. sa vie, son oeuvre*, 1923.
- [19] Mill, J.S.: *Principles of Political Economy*, 1848.
- [20] 松浦保: 「経済動学の一起点—パントレオーニの経済動学とその影響—」『三田学会雑誌』1962.
- [21] 松浦保: 「マッフェオ・パントレオーニ」『慶応義塾経済学年報』第6号, 1963.
- [22] Pantaleoni, M.: *Principi di economia pura*, 1889.
- [23] Pantaleoni, M.: «In occasione della morte di Pareto: riflessione», in *Giornale degli Economisti e Annali di Statistica*, 1924.
- [24] Pareto, V.: *Cours d'economie politique*, 1896.
- [25] Pareto, V.: *Manuel d'economie politique*, Edition française, 1909.
- [26] Pareto, V.: *Trattato di sociologia generale*, 1916.
- [27] Pareto, V.: «L'opera scientifica di Léon Walras» in *Giornale degli Economisti e Annali di Statistica*, 1910.
- [28] Pareto, V.: *Lettera autobiografia ad E. Sella*, 11 giugno 1913.
- [29] Pareto, V.: «Le lettere di Vilfredo Pareto a Léon Walras, 1891-1961» in *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, 1958.
- [30] Pareto, V.: *Lettere a Maffeo Pantaleoni*, 3 vols, a cura di G. De Rosa, 1960.
- [31] Parsons, T.: *The Structure of Social Action*, 1937.
- [32] Ricci, G.: «Commento alla memoria di G.B. Antonelli dell'anno 1886: Sulla teoria matematica della economia politica» in *Giornale degli Economisti e Annali d'Economia*, 1952.
- [33] Ricci, U.: *The economisti italiani, Pantaleoni, Pareto, Loria*, 1939.
- [34] Samuelson, P.A.: *Foundations of Economic Analysis*, 1948.
- [35] Schneider, E.: «Vilfredo Pareto. The economist in the light of his letters to Maffeo Pantaleoni» in Banca Nazionale del Lavoro, Quarterly Review, 1961.
- [36] Schumpeter, J.A.: *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1912.
- [37] Schumpeter, J.A.: *Ten Great Economists from Marx to Keynes*, 1951.
- [38] Schumpeter, J.A.: *History of Economic Analysis*, 1954.
- [39] Sensini, G.: *Corrispondenza di Vilfredo Pareto*, 1948.
- [40] Stigler, G.: *Production and Distribution Theories*, 1941.
- [41] Stigler, G.: «The Development of Utility Theory» in *Essays in the History of Economics*, 1965.
- [42] Tarascio, V.: *Pareto's Methodological Approach to Economics*, 1966.
- [43] Volterra, V.: «Sui tentativi di applicazione delle matematiche alle scienze biologiche e sociale» in *Giornale degli Economisti e Annali di Statistica*, 1901.
- [44] Volterra, V.: «L'economia matematica e il nuovo «Manuale» del Prof. Pareto» in *Giornale degli Economisti e Annali di Statistica*, 1906.
- [45] Walras, L.: *Éléments d'économie politique pure*, l'édition: 1877.

(経済学部助教授)